

自分から進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指して

～第6学年外国語活動～

五泉市立五泉南小学校

教諭 登條 里果

1. 目指した児童の姿

聞きたい、話したいという思いをもつようになれば、進んでコミュニケーションを図ろうとはしない。また、英語に対して積極的になれなかったり、自信をもって活動に臨めなかったりする児童がいるのも事実である。外国語活動を通して、コミュニケーションを図る楽しさを感じながら、自分から進んで英語を話したい、聞きたいと思えるような児童を育てたいと考えた。

2. 具体的な手立て

①クラスルームイングリッシュの活用

クラスルームイングリッシュを積極的に活用し、少しでも中学英語につながるようにしたい。そのために外国語活動の時間だけでなく、朝の会でも英語を使った簡単なあいさつを交わすようにする。月日・曜日、天気、時刻を聞くだけのものだが、毎日繰り返すことで英語での聞き方や答え方を定着させ、自信をもって英語を話せるようにしていきたい。また、覚えにくい表現についても繰り返すことで身に付けさせていきたい。

②児童の実態に合わせた、課題設定

6年生は総合的な学習の時間において、「将来の夢」をテーマとして取り組み、様々な職業やその道のプロである人について調べてきた。この活動を通して、児童たちは自分の将来像をもち始めてきている。

そこで外国語活動においても、総合的な学習の時間とリンクさせ、自分の将来の夢について発表する活動を設定する。自分の将来の夢について紹介したり、夢に対する思いを伝えたりすることとおして、相手に英語で自分の思いを伝えることができた、自分の英語が通じてうれしいという思いをもち、コミュニケーションを図る楽しさを味わえるようにしたい。

③新しい単語や表現に慣れ親しむための活動の工夫

すぐに新しい単語や表現を導入するのではなく、「人気の職業トップ10を当てよう!」という活動を行い、様々な職業の英語での言い方を知ることにつなげていく。外国語活動で学んだ単語や表現の定着を図るために、チャンツやゲーム等を取り入れ、それに合わせて話したり、歌ったりして楽しみながら英語に慣れ親しむようにしたい。

④友達とかかわり合う学習形態の工夫

児童同士がかかわるための学習形態を取り入れる。ペアやグループで英語を使ったゲームや活動を行っていく。

自分の将来の夢についての発表する場面において、互いに気持ちのよいコミュニケーションにするためには、相手に反応する言葉や相手を励ます言葉が大切であると考えます。コミュニケーションを図るために必要な言葉＝“Wow!” “Nice!” “Good job!” “Good luck!”



を伝え、ペアやグループ、学級全体での活動のときに少しずつ自然とそれらの言葉が使えるようにしていく。

3. 取組の実際（第6学年 Lesson8 What do you want to be?）

1 時間目…班で相談して「人気の職業トップ10」を当てよう！

2 時間目…将来の夢の尋ね方と答え方を練習しよう！

3 時間目…班で協力して将来の夢の発表練習をしよう！

4 時間目…自分の将来の夢を発表しよう！

単元目標を「自分の将来の夢について発表しよう！」とし、その目標達成に向かってスモールステップで単元を構成して授業を進めてきた。英語を話すことに抵抗感があったり、自信がなくてなかなか声が出せなかったりした児童が意欲的に英語を使ったゲームや発表練習に取り組んでいた。主活動に合わせて、毎時間、職業名や将来の夢の尋ね方や答え方はチャンツやゲームなどを使って、繰り返し表現を使うことで、児童が段々自信をもって英語を話せるようになってきた。

児童同士がかかわり合う学習形態を取り入れ、ゲームや簡単な会話でのコミュニケーション活動を行った。児童はゲームを楽しみながらもしっかり発音やQ&Aの仕方を練習していた。また、互いに発音や表現の仕方を教え合ったり、アドバイスし合ったりしてグループで発表練習をしていた。単元の終末の将来の夢の発表では、相手に英語でなんとか伝えようとする話し手とそれを聞き取ろう、理解しようとする聞き手の態度が見られた。



4. 成果と課題

○朝の会でも月日・曜日、天気の問題をすることで外国語に慣れ親しむ機会が多くもてた。

○チャンツはとても有効だった。リズムに合わせて職業の尋ね方や答え方を繰り返し言うことで、慣れ親しむことができた。

○児童の身近なものやリンクさせて題材を設定したことで、意欲的に活動したり学習したりする姿が見られた。

○これまで学習した表現“I want~”“I like~”を使って、職業に就きたい理由を英語で話すことができた児童が多くいた。

△自分の将来の夢の発表では、聞き返しや驚きを表したりするなど、コミュニケーションを図る手本となる姿を見せていければよかった。そうすることで、相手の言葉を繰り返したり、コミュニケーションを図るために必要な言葉を使ったりするよさに気付くことができた。

△発表場面では、児童同士の自然なやり取りがほとんど見られなかったため指示をたくさん出してしまった。英語を使って相手に自分の思いを生き生きと伝えようとするには時間が必要だと感じた。

△振り返り活動を工夫する必要がある。振り返りの観点を示したり、気付きや不思議に感じたことを書かせたりしていく。